

## 祭りの後で／後の祭り

津 上 英 輔

取り返しのつかないことだが、こゝを軽く考える我が身の質をあらためて認識させられた。

司会を引き受けるべきではなかった。

引き受けるなら、もつと予習が必要だった。

せめて発言予定者と事前の打ち合わせをしておくべきだった。

しかし今回のテーマは、これくらい無謀・無策でないと、司会など引き受けられたものではなかったかもしれない、と思ひ直すことにして、このような司会にもかかわらず明らかになったことを一つだけ取り出しておきたい。

文体とは、話しぶりにも似て基本的に交換不可能なものである。研究発表の場合、文体は「研究」というものの置かれた社会的脈絡や研究対象によつて規定されると同時に、あるいはそれ以上に、研究者が研究に向き合う態度そのものの表現であり、要するに研究者としての実存の姿であると言つてよい。

しかし今回のシンポジウムを終えて思ひ至つたのは、文芸学部または芸術学科の教員同士が、自分の必要に応じて相手の専門領域にかかる事実を確かめ、情報を求めることを越えて、お互いの研究に立ち入ることが減多に

ないということである。著書や論文を読んでも、そもそもなぜそのようなことを問題にするのかを話題にするとは少ないし、ましてその問題になぜそのような方法で接近しようとするのかを取り上げることは決してない。なぜなら、方法とは我々研究者の研究者たる拠り所に他ならないからであり、それを問題にすることが、相手の研究者としての存在を否定することにさえつながりかねないと恐れるからである。わずかに学年末の卒論や修論の口答試問のような学生指導の場で、学生に向けて何気なく発せられる言葉に、その教員の学問的信念を聞き取ってほっとしたり驚いたりすることで、かすかな意志の疎通がはかられているという情けない図が、本当のところであるような気がする。

しかしその種の議論がなされてこそ、我々研究者が一つの学部、学科に身を寄せていることの意味があるのではないか。専任・非常勤の教員が「共同研究」を通じて一つの研究集団をなす、というところまでは行かずともお互いの研究者としての立脚点すなわち方法について、緊張をはらんだ最低限の相互認識があるべきなのではないか。また、できればお互いの研究者としてのあり方について、理解の深部に発する、漠然としたものではない敬意があることが望ましいのではないか。我々相互にとつての学問的な刺激とはそういう雰囲気の中から生まれるものだろうし、また我々のもとで教育を受ける学生にとつて、特に方法の修得を目指す大学院生にとつて、教師が自他の方法につねに鋭い意識を向けておくことは不可欠のことである。

司会の拙さのせいで盛り上がり欠けたシンポジウムではあったが、「文体」を糸口に、そのような議論が今後少しでも芽生えるきっかけになれば、出席者全員の時間と苛立ちに、いささかなりとも埋め合わせがつくことになる。取り返しはつかないとしても……

なお、シンポジウム記録は、早稲田速記の松岡由起氏と白鳳社の相田昭氏に制作・編集していただいた正確な

聞き起こし原稿を基に、発言の主旨を変えない範囲で、と発言者に字句の修正をお願いした。発言を組み替え、脚色することで事件を劇的に仕立て直すことも考えられたが、一つの出来事の歴史的記録という性格を重視した。その趣旨に副ってご提出いただいた淺沼氏、佐野陽子氏、千足氏、宮川氏の補足ないし付帯論文は、したがって本文には組み込まず、別立てとした。添付資料は、東山氏の例文を除いて、当日配布したままのものである。

最後に、ご発言いただいた方々に感謝するとともに、せっかくご発言を望まれながらそれにふさわしい機会が訪れなかったという方々に、司会者としてお詫び申し上げます。